

妻と子どもは訴える

人材活用センター―全国連綿会編

国鉄を葬る人たちへの手紙

おとうちゃんの仕事にきてきた国鉄
許されへん信じられへん
あんたが生き生きしてるのは
汽車の話をするときや
負けられへんわ
あんたの汽笛を聞くまでは



写真／黒木 啓◎教育史料出版会

国鉄を葬る人たちへの手紙

1987年 3月10日 第1刷発行©

定価 1000円

編 者 人材活用センター全国連絡会

発行者 橋 田 常 俊

発行所 (株)教育史料出版会

〒101 東京都千代田区三崎町1-2-2

電 話 03-291-3571

振 替 東京2-79022

F A X 03-291-3572

印刷／埼玉福祉会・平河工業社 製本／三森製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-87652-117-4 C0036 ¥1000E

妻と子どもは訴える——人材活用センター—全国連絡会編
国鉄を葬る人たちの手紙

写真／黒木 啓◎教育史料出版会

新たなたたかいに向けて

国鉄労働組合中央闘争委員長 六本木 敏

国鉄当局は、一月二十八日、国鉄労働組合との交渉の席で、ついに悪名高い「人材活用センター」を三月上旬に廃止する」ことを明らかにした。

「人材活用センター」は、国鉄当局が「余剰人員」対策と称して昨年七月一日に発足させ、現在では全国で約千四百四十カ所、約二万一千人の労働者がここに配属されている。そのうち八〇パーセントを超える労働者が、国労に所属する役員・活動家である。

国鉄当局は、一方的強制配転によってこの人たちを劣悪な作業環境にとじこめ、一般労働者から「隔離」して、国鉄本来の輸送業務とは無関係の駅構内の草むしり、空缶拾い、文鎮づくり、客車の清掃、貨車の解体作業などを行なわせてきたのである。国鉄当局のこのような人権無視、人間としての尊厳とプライドをまったく無視した扱いに、ここに「収容」された労働者ばかりでなく、すべての国鉄労働者から非難と怒り、そして当局の不当性を追及する声がわき

あがり、きわめて短期間であるにもかかわらず、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌などで国内ばかりでなく、アメリカ、カナダ、フランス、イタリア、イギリス、ソ連などひろく世界各国のマスコミにもとりあげられ、大きな社会問題となった。また国会でもとりあげられ、国民諸階層に非常に大きな反響をよんだのである。

「人材活用」どころか、まさに、アウシュビッツなみだといわれる国鉄当局の非道さもさることながら、ここに「収容」されている仲間たちが不屈の精神で継続的にたたかい続けたことが、今回の「人材活用センター」廃止をかちとった大きな原動力であることを忘れてはならないと思う。

たたかいは、猛暑の最中、詰め所に扇風機をつけろ、水道・ガスをひけ、ロッカーよこせなど、すこしでも人間らしく生活できる環境の要求闘争からはじまった。仲間たちは、自分が「人活センター」に配属されたことを思いきって妻や子どもたちに打ち明け、話し合ったことによって、家族のきずながいっそう強まったと話してくれた。仲間たちは、自分たちにかけられた攻撃を、家族とともにねかえそうと頑張っているのである。これらのたたかいは、仲間の団結をより強固なものとしていった。地域共闘の輪を急速にひろげる推進力ともなった。まさに「人活センター」の仲間たちのたたかいは、国労運動を下からささえ、その活性化に大きな役割を果たしたのである。

そして、今、「人材活用センター」に“収容”されている労働者のみならず、その妻や子どもたちの怒りの声を全国から集め、この一冊にまとめ刊行する意義は大きい。

「人材活用センター」が廃止されたとしても、そのことは国鉄労働者に対する国鉄当局の「国労つぶし」攻撃に終止符がうたれたことを意味しない。むしろ新たな差別・攻撃の出発点だと自覚することが大切である。四月一日以降、新会社に移行したとしても、そこには依然として三万二千人の、いわゆる“余剰人員”と位置づけられる仲間たちが存在することを忘れてはならない。当然、このようななかにおけるわれわれの使命は、“新しい差別”を許さないたたかいを継続して追求していくことになる。

このたたかいは、国鉄をふたたび国民の手にとりもどすたたかいはじめ、八七国民春闘勝利、軍拡路線反対、大型間接税阻止、マル優廃止反対、国家機密法粉碎、地方自治体選挙勝利など、当面する緊急な諸課題と結合し、多くの勤労国民と結集してたたかい抜くならば、必ず勝利の展望は開けるものと確信している。

本書は、国鉄を葬ろうとする人々ののど元へつきつける反撃の手紙であると同時に、民主主義を守り、国鉄を愛する人々への連帯の手紙になるはずだ。

中央闘争委員会は、これからもたたかいの先頭になつてたたかい続ける決意である。

一九八七年二月

はじめに

政府・独占資本が一体となって国鉄の「分割・民営化」を強行するなかで、国鉄当局は人間の尊厳をも踏みにじる徹底的な攻撃をしかけてきた。「人材活用センター」はその象徴である。当局の計画通りに事が進めば、一九八七年四月一日を待たず、国労は解体され、「人活」に押しこめられた多くの労働者が国鉄から放り出されることになっていた。

しかし、こんなデタラメが許されるはずがない。自由と尊厳を否定されることは「死」をも意味する。人が生きるうえで、金やモノに換えられないものがある。昨年（一九八六年）十月九・十日の国労臨時大会において、「労使協調」路線の執行部案が大差で否決されたのも、こうした理不尽を許せぬ労働者根性が発揮されたからだと思う。

以来、われわれ「人活」の仲間たちは、常に闘いの先頭に立ってきた。

どこへ行っても、「人活」へ送られた者は以前より明るくなったと言われる。ぎりぎりの場面では、仲間と団結し、闘う以外にない。人間を信頼し、闘いつづける以外に、自らを救う道もまた、ないのである。

「人材活用センター」は、当局にとつての「アキレス腱」である。その差別性と不当性をわれわれは鋭く告発し、高圧的な労働者支配の根底を揺るがしつつある。

そんなわれわれの闘いを、妻や子どもや年老いた親たちが、それぞれの困難さのなかで支えてくれている。ともに闘っている。

われわれは、「人材活用センター」の実態を、われわれの家族の口から日本の、世界のすべての仲間へ伝え、この国の民主主義破壊を許さぬ決意で、「告発写真集」に続き、本書を刊行した。

本書が各地で闘っている仲間たちに連帯し、勇気を与えることを願う。

一人でも多くの手から手へ渡され、読み継がれて、働く者の連帯の輪を広げることが願っている。

編 者

国鉄を葬る人たちへの手紙◆もくじ

新たなたたかひに向けて◇六本木 敏(国鉄労働組合中央闘争委員長) 3

はじめに 7

I へ手記ーあんたの汽笛を聞くまでは

なつかしいなあ、ガタコン、ガタコン……◇大澤まさ子(夫／東京運転区人活センター) 14

無人駅とおじいちゃん◇二神勢津世(父／松山駅人活センター) 19

裏切りをこえて◇菊地末子(夫／札幌・苗穂工場人活センター) 23

ブルートレインで旅に出よう◇斎藤由紀子(夫／東京運転区人活センター) 27

十七年目のラブレター◇浅井啓子(夫／名古屋・笹島駅人活センター) 36

ナツパ服の父が好き◇関玲子(父／中野電車区人活センター) 38

父ちゃんの好きなビールを買って帰ろう◇西嶋外恵(夫／京都信通区人活センター) 49

お父さんガンバリヤー◇岸本康博(父／神戸港駅人活センター) 53

上を向いて歩こう◇鈴村さとみ(夫／美濃太田機関区人活センター) 55

友の変化が悲しい◇吉江敏子(夫／塩尻駅人活センター) 61

響け！母ちゃんの歌声◇野間優子(夫／吹田機関区人活センター) 64

II ヘルボン家族たちの今日、明日

男たちはなぜ死を選んだのかへ水戸・小田原◇ 76

もうつかれました／退職願（遺書）／深夜の電話

少しでもミスがあると……／花を飾ることさえ許されない

お父さんは国鉄に殺された／最後に会ったのは誰か？

声なき声を聞け

官舎追い出しに負けるかへ門司◇ 103

看板はずせ、官舎を出ろ／楽天夫婦

闘う国労ここにあり／不屈の女たち、男たち

行動する女たちへ蒲田・茨城・品川◇ 118

チエック、チエック／「カマデン」母ちゃんの会

こんな職場じゃ働きたくない／国鉄に働く女たち

子どもたちの風景へ福岡・千葉・東京◇ 134

人間にうえちよる／背広の父とナツパ服の父

「なるくさ、やれるくさ」／自己紹介のうた

少女のたからもの／子どもたちの会話／この子らのために

III へ座談会◇かえせハンドル

おれと国鉄

162

IV

国労の旗の下

166

「人活」は闘いの砦

177

大きくスクラムを組んで

182

〈手記〉私たちは負けない

お父さんは、そんなわるいことしない◇岡あかり(父／横浜貨車区人活センター)

190

おれの引っぱる汽車に乗せたい◇太田睦子(夫／吹田機関区人活センター)

192

夫の口ぐせ◇原田とし子(夫／東京運転区人活センター)

194

お父さんたちは子どもたちの道しるべ◇村上厚子(夫／広島保線区人活センター)

199

国鉄バスとともに◇井上つや子(京都自動車部人活センター)

203

小さいが強くて大切なものを知った◇永見志津江(父／明石電車区人活センター)

211

私もお父さんも負けません◇奥井陽子(夫／兵庫駅人活センター)

214

紙くずのように捨てられてたまるか◇青田百合子(夫／仙台新幹線第一運転所人活センター)

216

人間らしく生きるには◇神田テイ(夫／新潟・新発田駅人活センター)

217

「ポツポツ女房の会」ができた！◇本間博子(夫／八王子機関区人活センター)

219

〈解説〉国鉄解体と私たちの闘い

227

おわりに 253

●——文化人の一言アピール

一番ヶ瀬康子	72	寿岳 章子	159	本多 淳亮	224
岩井 章	73	立松 和平	160	矢崎 泰久	225
鎌田 慧	74	寺島アキ子	186	山田 洋二	226
神田 香織	157	中里 喜昭	187	(五十音順)	
清水 慎三	158	針生 一郎	188		

写 真 —— 黒木 啓(わらび座)

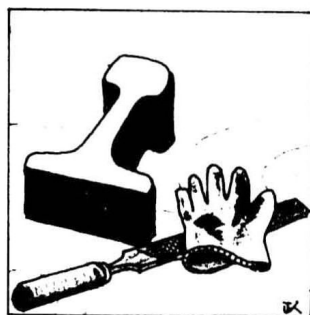
装 丁 —— 片岡悦子

イラスト —— 宮田正人(東京運転区人活センター)

II 章ルポ —— 飯山信子(男たちはなぜ死を選んだか・他二本)

奥村浩平(子どもたちの風景)

I 〈手記1〉あんたの汽笛を聞くまでは



なつかしいなあ、ガタコン、ガタコン……

大澤 まさ子（三十五歳）

夫／東京運転区人活センター

子どもの添い寝をして寝てしまっていた私は、小さな物音でふと目をさしました。その物音は、夫が玄関を開ける音でした。時計を見ると、午前零時をまわっています。夫は、このところ帰宅が遅い。長女が生まれてひと月もたない昨年の七月に人活センターに入れられ、日曜祭日も休まず忙しく飛びまわっていることが多いのです。

夫の話では、七つの職場から集められた九十人もの人たちが、ほんらいの仕事を奪われ、ルールを磨いての文鎮づくりや客車の蛍光灯カバーの清掃をさせられているということです。全員が国労組合員で、しかも役員や活動家がほとんどだそうです。夫は、「人活は、当局にとって目ざわりな者を隔離する収容所」だと言います。

人活センターに入れられて数カ月過ぎたある日、夫の実家に帰るために水戸線の一両目に乗りました。夫は運転席を見ながら、「なつかしいなあ、ガタコン、ガタコン……」とつぶやくように言いました。私は、その時はじめて、夫の悔しそうな、なつかしそうな表情を見ました。

夫は、現在三十八歳。昭和四十二年に国鉄に入り、東海道線を走るブルートレインの機関士を十年以上続けてきました。夫とは、三年前の五十九年、労働講座で知りあいました。グループで交流していましたので、二人きりでつきあったのは、わずか四カ月ほどです。口数が少なく、和やかな、やさしい人柄にひかれました。

夫は時間に厳しい人です。結婚して一年目のある日、私が朝寝坊をして起こすのが遅くなってしまう、遅刻寸前になった時、ふだん怒ったことのない夫に大声で怒鳴られてしまいました。鉄道員としての責任感の強さを感じました。

私は、現在は育児休暇中ですが、保母の仕事をしております。よく子どもたちを連れて、駅の近くまで列車や電車を見に行きました。そんな時、走る列車の運転席の窓に夫の作業服姿を思い浮かべ、目頭が熱くなったこともありました。

その夫が、今は仕事を奪われ、じゃま者扱いにされ、国鉄にとってどうでもよい作業を強制されています。夫の気持ちを思うと、私は本当に悔しさで一杯になります。私の働く職場にも組合があり、私はそこで役員をしていました。夫と同じように仕事を奪われたらと思うと、夫の心情が痛いほどわかります。

はじめて人活センターの話聞いた時、そして告発の写真集（『国鉄収容所』からの告発）人材活用センター（全国連絡会発行）を見た時、私は、こんなことが民主主義の日本にあっていいものか